第1章　子どもの自殺の実態

子どもの自殺は、一般に考えられているよりもはるかに深刻です。中学・高校教師の５人に１人は生徒の自殺に、３人に１人は自殺未遂に遭遇したことがあるという調査結果もあります※1。

また、最近では、「死にたい」と訴えたり、リストカットなどのように自らの身体を傷つけたりする子どもたちも、特殊なケースとして片づけることができないほど高い数値を示しています。

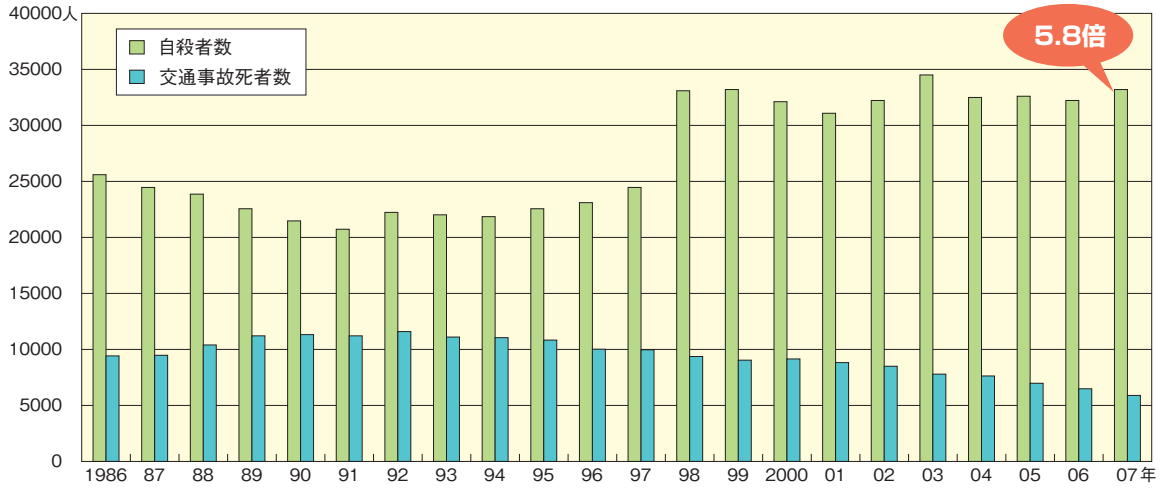
1　深刻な自殺の実態：自殺者と交通事故死者を比べると？

図表1-1 に示すように、わが国全体では最近の年間自殺者数は交通事故死者数の５倍以上にものぼっています。

かつては交通戦争といわれ、交通事故死者数が１万人をはるかに超えていたこともありますが、幼稚園から高校に至るまで交通安全教育が実施されるとともに、道路整備、自動車の性能の向上、交通法規の厳正化なども実施された結果、年間交通事故死者数は5,744人（2007年）にまで減っています。それに比べ、年間自殺者数はこの10年間は毎年３万人を超えているにもかかわらず、学校における自殺予防教育は全くといってよいほど行われていません。

また、自殺や自殺未遂（少なく見積もっても既遂者数の10倍以上）が１件生じると、強い絆のあった人のうち最低５人は深い心の傷を負うという推計もあります。このように、自殺は死にゆく３万人の問題だけでなく、毎年わが国だけでも100万人を超える人々の心の健康を脅かすきわめて深刻な問題なのです。

図表１-１　自殺者数と交通事故死者数の比較



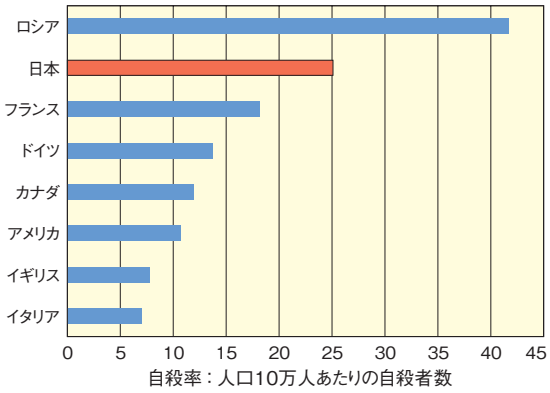
（警察庁生活安全局地域課:平成19年中における自殺の概要資料.警察庁 2008）

※１　上地安昭：教師のための学校危機対応実践マニュアル．金子書房、2003

2 自殺率の国際比較：日本の自殺率は世界の中でどれくらい？

世界では年間約100万人が自殺で亡くなっています。自殺は紛争、飢餓、単純な感染症などで苦しんでいる国や地域では十分な関心が払われず、WHO（世界保健機関）に正確な統計を報告していない国も世界には数多くあります。Ｇ８（主要国首脳会議８カ国）中で日本の自殺率をみると、**図表1-2** のように、ロシアに次いで第２位と、きわめて高い値を示しています。

図表１-２　Ｇ８各国の自殺率



（内閣府：平成19年版，自殺対策白書 2007）

3 年齢層別死因から見た自殺：それぞれの年代ごとの死因の中で、自殺は何位？

どの年齢層でも、自殺は死因の上位に位置しています（**図表1-3**）。特に、20～39歳までの死因の第１位は自殺です。また、15歳から19歳の世代では、自殺は、不慮の事故に次いで、第２位の死因になっています。

図表１-３　10代～30代の死因上位3項目

年齢	第1位	第2位	第3位
10～14	不慮の事故	悪性新生物	自殺
15～19	不慮の事故	自殺	悪性新生物
20～24	自殺	不慮の事故	悪性新生物
25～29	自殺	不慮の事故	悪性新生物
30～34	自殺	悪性新生物	不慮の事故
35～39	自殺	悪性新生物	心疾患

（厚生労働省健康福祉部健康福祉指導課:
平成19年人口動態統計の概況，厚生労働省 2008）

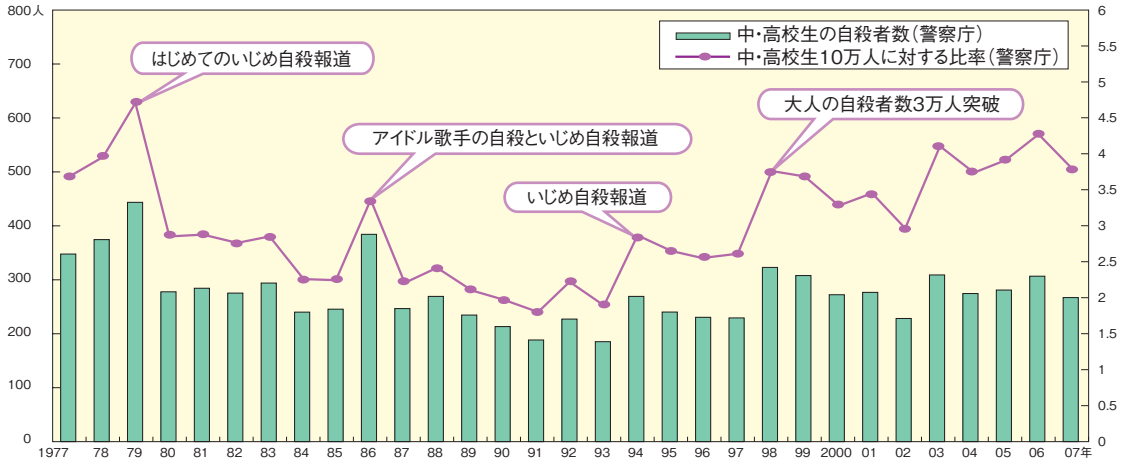
4 児童生徒の自殺：子どもの自殺の実態は？

小中高校生の自殺者数は、いじめ自殺という言葉がはじめて登場した1979年やアイドル歌手の自殺やいじめ自殺の後に複数の自殺が誘発された1986年のように突出している年もありますが、毎年300人前後で推移してきました。しかし、**図表1-4** のように、自殺率をみると、最近の少子化のため上昇傾向にあります。なお、小学生の自殺者数は年間10人以下の場合が多いため自殺率は中学生と高校生の数で計算しました。また、2006年もいじめ自殺がセンセーショナルに報道され、自殺率は高くなり、大学生までを含めると実数でも886人と、1978年の調査開始以来、最悪の数字を示しています。

全自殺者の中に占める未成年者の割合は約２％ですが、全体に占める割合が小さいからといって子どもの心の問題に真剣に取り組まないでいると、大人になってからの心の健康に深刻な問題を生じることにもなりかねません。これから人生が始まろうという時期に自らの手で人生を閉ざすことほど悲しいことはありません。他の子どもにとっても保護者にとってもあまりにも痛ましいことです。

また、自殺は連鎖を呼ぶ（群発自殺）といわれますが、次頁のグラフ（**図表1-4**）からも子どもたちは特に他者の自殺の影響を受けやすいことがわかります。

図表1-4　中・高校生の自殺者数と自殺率



（警察庁発表の統計より阪中が作成：全国の中・高校生の総数 1986年:1137万人　2007年:707万人）

5 自傷行為の実態：自分の身体を傷つける子どもの割合は？

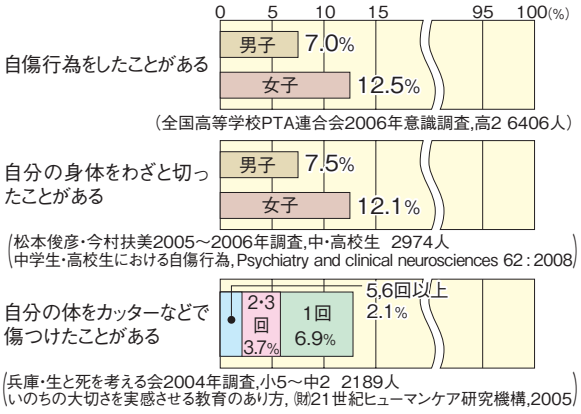
自分の身体を傷つける中・高校生は10％を下らないという報告があります（**図表1-5**）。過去に１回でも自傷行為をしたことのある人は、自傷行為を認めない人に比べて、その後、はるかに高い確率で自殺によって死亡していると言われています。たとえその時は命を落とすことのない自傷行為であったとしても、適切なケアを受けられないと、実際に死亡する行為に発展していく危険が高いことを忘れないでください。

6 子どもをとりまく死の問題：子どもの死に対する意識は？

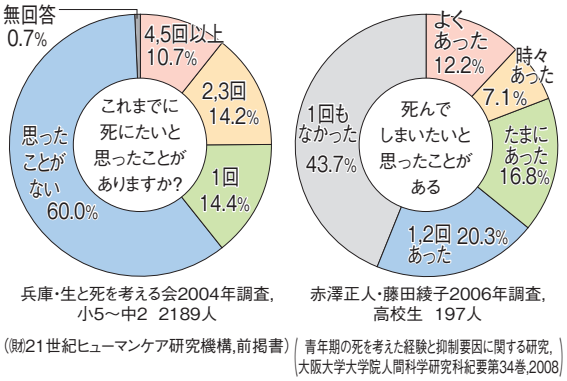
「死にたいと思ったことがある」という子どもは、小学生の高学年から増え始め、低くみても中・高校生では２～３割にも達するという報告があります（**図表1-6**）。思春期・青年期の子どもたちは真剣に生きることを考え始めるからこそ、その裏返しとして死が頭をよぎり、希死念慮（死にたいと思う気持ち）も高まるのではないでしょうか。

また、長崎県教育委員会による「児童生徒の『生と死のイメージ』に関する意識調査」をみると、10％前後の子どもたちが「人は死んでも生き返る」と考え、中学生でも「人は死な

図表1-5　子どもの自傷行為の実態



図表1-6　「死にたい」と思ったことのある子どもの割合

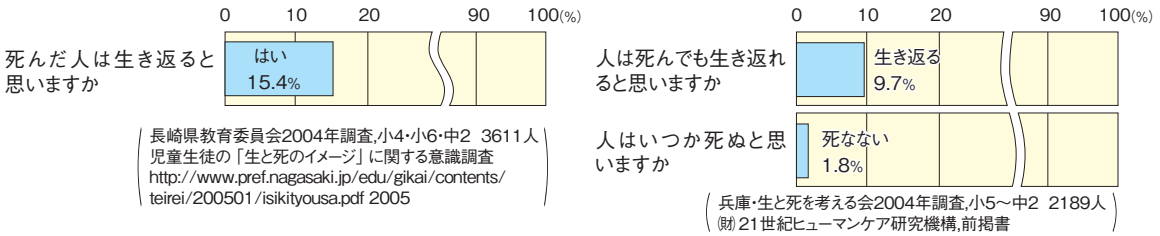


兵庫・生と死を考える会2004年調査,小5～中2 2189人
（財）21世紀ヒューマンケア研究機構,前掲書）

赤澤正人・藤田綾子2006年調査,高校生 197人
（青年期の死を考えた経験と抑制要因に関する研究,大阪大学大学院人間科学研究科紀要第34巻,2008）

ない」ととらえている子どもがいることがわかります（**図表1-7**）。子どもによっては、人生が一度限りであり死は避けられないものであるという認識が十分に育っていないと考えられます。そこで、「死を遠ざけるのではなく、豊かな死のイメージが現実の死を防ぐことができる」※2という視点から生や死の教育を行うことが大切でしょう。

図表1-7　子どもの死生観



まとめ

最近になって自殺が増えていることが問題になっていますが、働き盛りや高齢者の自殺に比べると、子どもの自殺には十分な関心が払われていないのが現状です。本章では子どもの自殺が一般に考えられている以上に深刻である現実を示しました。この問題に正面から取り組む必要があることが理解できたでしょうか。この世代の心の健康が一生の健全な心の発達につながるのです。これまでのように子どもの自殺をタブー視したり、特殊な問題として片づけたりするのではなく、学校の教育活動の一環として捉え、大切な課題として向き合う時が来ています。

コラム❶　「いのちの教育」と自殺予防

学校において自殺予防教育を実施することについては、多くの教師がその必要性を認めながらも、「実行に移すとなると難しい」と感じているのが実情のようです。自殺予防ということを前面に出すと、「寝た子を起こすようで心配」「大人になってからでもいいのでは」「私にはとても無理」などと、教師の心理的抵抗を引き起こしてしまうことも少なくありません。未だタブー視されがちな自殺予防教育を、危機意識を持った一部の教師が個人的に取り組む活動から学校全体の教育活動へと位置づけていくためには、教師の間で自殺の問題に対する理解と連携の芽を育てることが必要なのではないでしょうか。そのためには、リストカットをしたり「死にたい」と訴えたりする子どもの問題を事例検討会で取り上げて共通理解を図ることや、小学校から系統だった「いのちの教育」や「死の教育」の実践を積み上げていくことが大切だと思われます。

教育活動全般を見通した日常的な取組なしに、いきなり自殺予防だけに焦点を当てたプログラムを実施したとしても、戸惑いや反発が予想され、子どもの自殺を防ぐうえでの大きな効果は期待できないのではないでしょうか。教科学習（特に保健体育や社会科など）と道徳・総合的な学習の時間・特別活動との関連を図りながら、生命の大切さや人生のかけがえのなさを実感する「いのちの教育」を進め、その土台のうえに自殺予防プログラムを実施することが求められます。

※2　河合隼雄：影の現象学．講談社学術文庫、1987